

メフィストーフレス考

高橋, 義孝

<https://doi.org/10.15017/2332844>

出版情報 : 文学研究. 58, pp.119-133, 1959-07-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



メフィストーフエレス考

高 橋 義 孝

これまでのあらゆる『ファウスト論』は、当然のことながら、主人公ファウストのために多くの頁を割いているし、ファウストに関するモノグラフィイも数多いが、メフィストーフエレスに関するモノグラフィイは、それに比して皆無に等しいといっても過言ではあるまい。^{*} むろんファウストを論ずるほどの者は例外なしにまたメフィストーフエレスにも言い及ぶが、しかしメフィストーフエレスは、ほとんど因襲的といってもいいような性格描写によって片附けられてしまう宿命にある。人々はメフィストーフエレスのわきをいわば通り過ぎて行く。そしてその通り過ぎ方にも一定の形があるのである。

^{*}たとえば Hermann Reich, Goethes Mephistopheles als Clown im Minus, Velhagen und Klasing's Monatsheften, Dezember 1920. の如きものもあるにはある。

そして『ファウスト』論者は、メフィストーフエレスをどう捉え描いてきたであろうか。諸家のメフィストーフ

エレス性格描写において共通する特性には、つぎのようなおよそ六つのものがある。その第一は、メフィストーフエレスのサーカズムである。彼がシニクだということである。「サーカステイックな冷嘲家」(ヴィトコフスキー)、「シニズム」(トーマス・マン)、「サーカズム」(トレンデレンブルク)など。その第二は彼が「物を否定する霊」(338) だということである。「悪と否定の理念」(ヴィトコフスキー)の権化、「つねに否定する」(トレンデレンブルク) 悟性、「魔神的な破壊意志」を持った「光と生命への憎悪の人格化・原始の闇と混沌の息子」(トーマス・マン)、「彼のニヒリズム」(トルンツ) など。その第三は彼が鋭い悟性の持ち主だということである。「実践的悟性」と「人間や事物に対する狂いのない冷静な観察と評価」とを持った「現世を知りつくした冷徹なリアリスト」(ヴィトコフスキー)、「彼の合理主義」(トルンツ)、「的確に、また好んでいろいろな欠点を見ぬく悟性」(トレンデレンブルク)の持ち主など。その第四は、「人間

の欲望」、「人間が何を要求するかが」(10193—10195。)分らない存在だということである。彼には「自己没却的な理想的努力や、清純な愛や、創造的活動などに対する一切の理解が欠けている」(ヴィトコフスキー)、「ものごとのいい面を見る眼を持」たず、「尊敬・感謝・愛・同情・『人間らしさ』」(トレンデレンブルク)を理解できない存在など。その第五は、彼の好色である。彼は「人間の中にある猥的な衝動、特にあらゆる衝動中で最も強烈な性欲衝動の代表者」(トレンデレンブルク)、「何が何でも官能的な欲望を満足」(ヴィトコフスキー)させようとする存在など。その第六は、ユーモアである。「火花を噴くようなユーモア」(ヴィトコフスキー)、「尽くすることを知らぬユーモア」(トレンデレンブルク)など、大体以上六つの特性を諸家は「メフィストフェレス」という語原学的に説明不可能な一固有名詞の紐でたばね縛って、「この、あらゆる文学の中で、最も天才的で、最も印象深い、最も活きいきとした悪魔の形姿」(トーマス・マン)を片附けてしまうのである。しかし第一に、このような性格描写で必要にして充分に、正當にメフィストフェレスという存在が捉えられているのであろうか。メフィストフェレスは、どんな形においてであらうと、どう解釈されるにせよ、こういう性格描写で片附けられてしまつてしかるべきような存在であらうか。また第二に、

なぜ人々はメフィストフェレスのわきをただ通り過ぎてしまつて、ファウストの許におけるように、ここに立ち止ろうとはしないのであろうか。

第一の疑問についていうならば、つぎに挙げる二つの事実がすでに、メフィストフェレスの置かれている現状の不当であることをわれわれに暗示しているように思われる。第一に、第一部五四四行—五四五行にこういうせりふが見える。(引用文は以下すべて森鷗外訳『ファウスト』に拠る)

どうせ君の肺臓から出た事でなくては、
人の肺臓に徹するものではない。

九六八五行—九六八六行にはこう見える。

人の胸に徹へさせるには、自分の胸から出て来なくてはならぬ(と云ふのが、その税金だ。)

前のせりふはファウストの、後のせりふは闇の女フォルキアスに化したメフィストフェレスのせりふである。劇における登場人物の性格統一という観点からすれば、ゲーテの不手際というよりはかはらないが、しかしこのせりふは、それぞれファウスト、メフィストフェレスのせりふとして立派に通用する。とすれば、この恐らくは偶然の一致にはある深い意味がなくもない。第二に、『ファウスト』の最も人口に膾炙した文句の一つであるところ

ろの

兎に角君に教へるがね。一切の理論は灰いろで、
緑なのは黄金なす生活の木だ。

(2038—2039.)

というせりふを吐くのは、意外にもファウストではなくてメフィスト・フェレスなのである。そしてこれまでメフィスト・フェレスの身上は「黄金なす生活の木」を阻い否定し破壊するところにあるとされてきた。つまりメフィスト・フェレスが主人公ファウストと寸分違わぬせりふを吐き、いかにもファウストの口からこそ出そうな最も重要な文句を口にするということは、メフィスト・フェレスがファウストの単なる敵役、脇役以上の存在であることを暗々裡に物語っているとしてよく、そうであればわれわれはこれまでのようにメフィスト・フェレスの横をただ通り過ぎてしまつてはならないということになるであらう。

第二の疑問についていうならば、人々がメフィスト・フェレスの許に、ファウストの場合におけるように永く立ち止ろうとしないのは、第一に、殊にドイツの『ファウスト』論者に、半ば無意識化したメフィスト・フェレス嫌悪があるからではあるまいか。ファウストはメフィスト・フェレスを「皮肉な、悪辣な、厭な性質」(10194.)を持った存在と評するが、メフィスト・フェレスは人々

によつて永くこのような存在として受け取られてきたようであるし、また人々もメフィスト・フェレスをこのような存在と見て少しも怪しみ訝らうとしない。ここにメフィスト・フェレスがともすれば軽視される心理的根拠があるのであらう。第二に、メフィスト・フェレスの性格は一見統一を欠いているから、これを全体として捕捉したいという事情が考えられる。メフィスト・フェレスは一個の便宜的なマスクにすぎず、このマスクがある時はゲーテ自身が、またある時はファウストが、あるいはまたメルクが、ベリリッシュが、アルブレヒトが、ヘルダーが被つて劇中に登場するといった観がないこともない。何よりもまず主人公のファウストに比して、メフィスト・フェレスの性格には紛れもない不整合があり、その行蔵は首尾一貫性を欠き、従つてこれを統一的な人格・一存在と見なすことは、なるほど困難でなくもない。*
それ故にこそ多くの『ファウスト』論者はとかくメフィスト・フェレスを、たとえば「悪と否定の理念」(ヴィトコフスキー)の化身などといつて済ませてきたのであるう。

* しかしメフィスト・フェレスは「一人物としてこれを見るならば、一箇の啓示」であるとする素朴なゲーテ礼讃者トレンデレンブルクのような論者もないこともなく(Adolf Trendelenburg, Goethes Faust, 2 Bde., Berlin 1929, Bd. I, S.

47.) またヴィトコフスキーも「メフィストフェレスの性格は首尾一貫している」(Georg Witkowski, Goethes Faust, 2 Bde, Leipzig 1929, Bd. II, S. 154.) と述べているが、このヴィトコフスキーの言葉には、「メフィストフェレスが人間の形を採った一個性として写實的にゲーテによつて描写されているかぎりでは」という重要な条件が附せられている。なおこの小論においては、数多くの『ファウスト』論を、上記のトレンデンプルクとヴィトコフスキーのそれ、及びトルンツ(Erich Trunz, Goethes Faust, Hamburg 1949.) とトーマス・マン(Thomas Mann, Über Goethes Faust, in Adel des Geistes, Stockholm 1948.) のそれの四者によつて代表せしめた。そしてメフィストフェレスを問題にするかぎり、それでさしたる支障はないと考える。

なるほど、メフィストフェレスの与える主要印象がシニクのそれ、冷嘲家・毒舌家のそれであることは、いかにしても否定しがたい。彼がグレートヒエンを指して、

何も、あゝ云ふ運命に、あの女だけが始めて逢つた
のではありませんよ。

(曇れる日)

といった言葉は、ファウストに「狗奴。胸の悪い、獣にも劣つた獣奴」と叫ばせるばかりか、トレンデンプルクのような素朴なゲーテ研究家をも憤激せしめる。とにかくメフィストフェレスは殊に女性に手きびしい。

一体女と云ふ奴は、相手が昔流に信心深くて素直かどうかと、氣にして穿鑿しますよ。宗教にへこむ奴なら、自分の言ひなりにもなると思つて。

(3525—3527.)

殊に女を旨く扱ふことを修行しなくては行けない。女と云ふ奴はこゝが痛いのかしこが苦しいの、といろ／＼な言葉の絶える時はない。それが只一箇所から直すことが出来るのだ。

(2023—2026.)

宗教はこの上ない好餌である。

その言草が好い。「それは御殊勝な事でござります。欲しい物をお捐になる丈、それ丈御利益があります。お寺の胃の腑は大丈夫でござります。

これまで国を幾つも召し上つても、

つひぞ食傷はなさりませぬ。

筋の悪い品物を召し上つて消化なさるのには、お前様方にわしが言ふがお寺ばかりだ。」

(2834—2840.)

シュヴェルトラインの死亡偽証を洩るファウストもたちまちにやり込められる。

いやはや。おえらいぞ。そこで君子をお出しになる。一体偽証と云ふものをなさるのが、こん度が始のお積りですかい。

これまであなたは仰山らしく、神はどうだ世界やその中に動いてゐる物はどうか、人間やその心の中で

考へてゐる事はどうかと、定義をお下しになる。しかもしやあゝとして大胆にお下しになる。好く胸に手を置いて考へて御覧なさいよ。

正直のところ、そんな事をシュエルトラインと云ふ男の

死んだ事より確かに知つてお出になつたのですか。

(3040—3049.)

「森と洞」の場面で、自然の中に身を置いて、ひとりグレートヒエンを想っているファウストに向つて彼は毒舌の矢を浴びせかける。

時としては又溢れる愛を万物に及ぼし、

下界の人の子たる処が消えて無くなつて、

そこでその高尚な、理窟を離れた觀察の尻を、一寸口では申し兼ねるが、

(猥褻なる身振。)

ですね。これで結ばうと云ふの

(3280—3292.)

色恋の正体もメフィストフェレスには見通しである。

それから何物にも打ち勝つ、只一つの熱情だの、永遠に餘ることのない恋愛だの、真実だのと、

いろ／＼並べるのも心からでせうか。

それから最後に神が好餌にされる。

(3056—3058.)

わたしには氣取つた言草は出来ない。

わざと氣取つて見たところでお前さんが笑ふだけだ。

それとも笑ふなんと云ふことはもう忘れてゐなさるかしら。

(276—278.)

神に笑いが無い、これは神に対する最も痛烈な嘲罵であらう。

ところでこういうサーカズム、シニシズムは、仔細に觀察すると一種のモドウス・ヴィヴェンディにすぎぬことが判明する。それではこれは何物と何物との妥協案なのであらうか。

いうまでもなくその一つは、ニヒリズムを媒介としてサーカズム、シニシズムとして外化するところの、悪・破壊・否定の理念である。

まあ、お聞なさい。わたくしは何千年と云ふ間

この靱いお料理（人生）を嚼んでゐるから、知つてゐます。

揺籃から棺桶までの道中に、

この先祖伝来の餓頭種をこなす奴はありませんよ。

わたしどもは知つてゐます。この一切の御馳走

は神と云ふ奴でなくてはこなせない。

なんでもそいつが自分はいつも明るい所にゐて、
わたしどもをいつも暗い所に置いて、
あなたの方に夜昼を寝たり起きたりして過させる
のだ。

(1776—1784.)

新進気鋭の得業士のうしろ姿に彼はこんな捨てぜりふを
浴びせかける。

変物奴。息張つて行つて見るが好い。

賢い事も愚な事も、昔誰かがもう考えた

事しか考へられぬと云ふことが

分かつたら、さぞ悔しがるだらう。併し

あんな奴がゐたつて、世間は迷惑しない。

少し年が立つと別な氣になる。

もとであるうち、どんな泡が立つても、

しまひには兎に角酒になる。

(6807—6814.)

「憂鬱な」という形容詞をメフィストフエレスに与え
たのは、たしかトーマス・マンであった。ニヒリズムは、
不思議なことに抒情詩を排除しない。

あの鐘の音（礼拝堂）は、

誰の上品な耳にも厭に聞えます。

あの詛はれたばおんばおんが

晴れた夕空をも曇らせて、

産湯から葬式までの、

あらゆる世間の出来事に交つて聞える。

丸で人生と云ふものが、ばおんとばおんとの間の、
消えてしまつた夢のやうだ。

(11261—11268.)

ファウストが仆れた時、メフィストフエレスは古往今
来のニヒリストの古典的せりふを吐いている。

御殿から出て、狭い家（墓穴）に這入る。

どうせしまひはこんな馬鹿氣た事になる。

(11529—11530.)

今何やらが過ぎ去つた。それになんの意味があ
る。

元から無かつたのと同じぢやないか。

そして何かが有るやうにどうく廻りをしてゐる。

それよりか、己は「永遠の虚無」が好きだ。

(11600—11603.)

のみならず「四大は己達とぐるになつて」いるから「な
んでもしまひには滅びる」のであり、「どの道お前方は助
からない」(11548—11550.)のである。

ニヒリズムは、抒情詩と結びつくやうに、急進主義に
も結びつき、つぎのやうなせりふでメフィストフエレ
スは自己の破壊と否定と死の理念の具現者であることを
この上なくはっきりと宣言する。

こいつには（生命に対しては）

これまでいろ／＼な企をして見ましたが、
どうにも手の着けやうがありません。

海嘯、暴風、地震、火事、どれを持つて行つても
跡には陸と海とが依然としてゐるですな。

それからあの禽獣とか人間とか云ふ阻はれた物は、
一層手が着けられませんか。

今までどれ程葬つたでせう。

それでも矢張り新しい爽かな血が循つてゐます。
そんな風で万物は續いて行く。考へると、気が狂
ひさうです。

空気からも、水からも、土地からも、

乾いた所にも、濡れた所にも、熱い所にも、寒い所にも、

千万の物の芽が伸びる。

若しわたしが火と云ふ奴を保留して置かなかつ
たら、

これと云ふ特別な物がわたしの手に一つも無い
所でした。

さて周知の問答である。

(1364—1378.)

ファウスト

そんなら好い。一体君はなんだ。

メフィストーフエレス

却て常に善を爲す、彼力の一部です。
常に惡を欲し、

ファウスト

ふん。その謎めいた詞の意は。

メフィストーフエレス

わたしは常に物を否定する靈です。

そしてそれが至当です。なぜと云ふに、
一切の生ずるものは滅しても好いものです。

して見れば、なんにも生ぜぬに如くはない。
かうしたわけで、あなた方が罪惡だの、

破壊だの、約めて言へば惡と仰やるものは、
皆わたしの分内の事です。

(1335—1344.)

そしてもう一方の物は何か。人間の錯覺、破却を媒介と
してサーカズムやシニシズムとなつて現われるというの
をその一つの可能性とするところの知性である。つまり、
メフィストーフエレスの犬儒主義やサーカズムは、破壊・
否定・虚無・死と、知性とのモドウス・ヴィヴェンディ
にはかならないのである。

己は一体何物だと絶望するファウストに向つて、メフ
ィストーフエレスはほとんどさりげなくこういつていつ
ている。

あなたですか。あなたは、さやう、やつぱりあなた
ですな。

何百万本の毬毛を植ゑた假髪をお被なさつても、
何尺と云ふ高さの足駄をお穿なさつても、

所詮あなたはあなたですな。

(1806—1809.)

人間同士の闘争、それぞれに大義名分を掲げての死闘も彼の眼にはどう映るか。

自由の権利の為に

闘つてゐると云ふが、好く見れば、

奴隷が奴隷と勝負をしてゐるのだ。

(6961—6963.)

錯覚破却を可能にするのは、曇りのなり知性の眼があればこそである。ドイツ観念論は「理性」と「悟性」という二つの、広義の知的能力概念を作り出したが、そしてほとんどすべてのドイツの『フアウスト』論者は、この一片の十八世紀を今日もなおいまだ棄て切れずにいるが、われわれは広義の知的能力に敢えて理性と悟性の二つのものを考える必要はさらになく、すくなくとも心理学的にはいわゆる知性という概念で事は十分に足りるのである。のちに引用するシラーの言葉に隔靴搔痒の観があるのも、このドイツ観念論が作り出した「理性」偏見の故にはかならない。あるのはただ一つ、知性である。そしてメフィストフェレスは、人間の知的能力に理性と悟性という区別を立てることの無意味と不当を悟る時、誰の眼にも明らかに、また自ら「知性」の体現者、パールのエクセランスの知性的存在として立ち現われてこないわ

けには行かない。毒舌、冷嘲の気配を一切とどめず、ざりとてまた情熱や欲望の湯気で曇らされてもいない、いかに多くの叡智の言葉がメフィストフェレスの口を衝いて出ていることであろうか。彼は美とモラルを語っては、

美しさと廉恥とが、下界の緑の道を

手を引き合つて一しよに歩かぬと云ふ諺は

古いけれども、その意味はいつ迄も高尚で、真実だ。

(8754—8761.)

といい、正義については、

暴力のある所に正義は帰する。何を持つてゐるかが問題だ。

どうして取つたかは問題にならぬ。

(11184—11185.)

といい、法律については、

兎角法律制度なんと云ふものは、

永遠の病気のやうに遺伝して行く。

先祖から子孫へぐづぐづに譲り渡されて、

国から国へゆる／＼と広められる。

そのうち道理が非理になつて、仁政が秕政になる。

人は洵季は生れたくないものだて。

さて人間生れながらの権利となると、

惜いかなどこでも問題になつてゐない。

(1972—1979.)

といい、人間の営為については、

勞と功とは連鎖をなしてあると云ふことが、馬鹿ものにはいつまでも分からない。

よしや聖賢の石を手にしたところで、石はあつても聖賢はなくなるだらうて。

(5061—5064.)

といい、人間の欲望の限界については、

そこでお互様に早速又お互の智慧の屈く限界線に到着したと云ふものです。そこまで来ると、あなた方人間と云ふ奴は、氣が変になつてしまふのです。わたし共と一しよの共同生活が末まで遂げられんのなら、あなた、なぜその共同生活に這入つたのです。あなたなんぞは空が飛びたくはあ

(曇れる日)

といい、何よりもまず上記の「緑なのは黄金なす生活の木だ」という名せりふがある。そして知性にとっては、知性自体が知性の考察と分析の對象になる。知性としてのメフィストフェレスは自己分析をも忘れていない。

わたしは全知ではないが大いゝろんな事を知つて居ますよ。

(1582.)

自己が人間世界で果している役割もまた当然自覺している。

わたしがゐなかつたら、あなたのやうな

此世界の人間はどんな生活をしたのですか。

人間の想像のしどころもどろを

わたしが当分起らぬやうにして上げた。

(3266—3269.)

ヴィトコフスキーは「惡と否定の理念としてのメフィストフェレスにとって、ユーモアも、実践的悟性も、広大な経験も、必ずしもぜひとも必要な属性であることを要しない」といつているが、このようにメフィストフェレスを純粹知性として捉える時は、ユーモアは當然その欠きがたい属性とならざるをえない。けれどユーモアは純粹知性が現実の世界内に存在する際の必然的な衣裳の一つだからである。純粹知性は、純粹知性そのものとして、いわば裸でこの現実の世界内に存在することはできない。ファウストの靈魂という欲望の獲物を、まゐりと天使たちに持ち去られて、メフィストフェレスは、

そこで誰に苦情を持ち込んだら好いだらう。

誰が己の既得権を恢復してくれるだらう。

手前年が寄つて人に騙されやあがつたぞ。

自業自得だ。ひどく景氣が悪いぞ。

己は馬鹿げた下手を遣つた。外聞の悪い。

大為事が無駄になつてしまつた。

(11832—11837.)

と嘆いているが、そのくせ自分ではかつてファウストに向つて、

絶望の爲めに狼狽してゐる悪魔程

不似合なものは、先づ世界にありませんまいぜ。

(3372—3373.)

といつてゐるのであるから、知性とユーモアの關係は予想以上に深刻だとしなければならぬ。人類にとつての大きな禍であるところの新鋭兵器を生んだのも知性であるが、その兵器が人類に今にも不幸を齎しかねないのを見て、恐らく知性は「そこで誰に苦情を持ち込んだら好いだろう」と嘆くわけであらう。

とすると、サーカズムをそのモドウス・ヴィヴェンディイとする二つのもの、死と否定と破壊と、知性ととの間には、すくなくともサーカズムに媒介されうるといふかぎりには、何らかの關係があるとしなければならぬ。とはいふものの、死・否定・破壊と知性とが何らかの形で同じ平面に立つといふことは、常人の腑に落ちないことである。なぜならば前者は疑いもなく明らかな「悪」であるのに、後者は同様に疑いもなく「善」なのであるから。メフィストフェレスの上掲の「常に悪を欲し、却て常に善を爲す、彼力の一部です」という返答に、ファウス

トも、「ふん。その謎めいた詞の意は」といつて首をかしげている。知性と死・否定・破壊とが同じ平面に立つといふこと、あるいは「常に悪を欲し、却て常に善を爲す」存在の含む矛盾、不条理はいかに説明されなければならぬか。トーマス・マンは、この一見複雑なメフィストフェレスを目前にして、「メフィストフェレスは、ゲーテの青年時代の巨人主義の反語的自己修正である」といつて、メフィストフェレスを料理しようとしてゐる。そしてこの「反語的」にマンが自己のメフィストフェレス解釈のすべてを托しているといふことは、つぎのような一節によく現われている。「ゲーテがこの悪魔の形姿を弄び、はつきりとした輪郭を与えぬままに隠見させ、その性格や自己解釈を一定させず、照れさせ、真正面から自己自身に対決することを避けさせてゐることは明かである。たとえば、メフィストフェレスがそもそも悪魔そのもののなか、あるいは数多い悪魔の中の一つなのか、つまり地獄の眷族の代表者（「彼力の一部」）なのか、あるいは悪そのものの化身なのかは、一向にはつきりしないし、また故意に全篇を通じてはつきりしないままにしてあるのである*」それが「反語的」の謂だといふのである。しかしこの「反語的」解釈が、メフィストフェレスの単にネガティブな一規定にすぎないことはいふまでもない。すでにヴィトコフスキーも、上に言

及したように、「ただ実践的悟性・豊富で広い経験・ユーモアなどは、われわれがぜひとも悪に對して要求せざるをえない諸屬性ではなく、又、否定の代表者はまた必然的に世界全体への理性的洞察を欠いていることを要しない」といって、まずメフィストーフエレスの性格上の形式的な矛盾を指摘し、ついで「事実上この巧みな作中人物に欠けていなくもない矛盾は、ここに求められるべきではない。むしろその矛盾は他の諸根拠、すなわち一面悪魔伝承に、他面ゲーテの意嚮の変遷に発するところの他の諸根拠から出てきたものである」といって、地霊の手下としてのメフィストーフエレス、悪魔の手下としてのメフィストーフエレス、悪魔（サタン）そのものとしてのメフィストーフエレスなどが、作中のこの一人物「メフィストーフエレス」のうちに入りまじっていることをいい、特に（マンの言葉を藉りるならば）「地獄の眷族の一代表者なのか、あるいは悪そのものの化身なのか」、「そこに否定しがたい一つの矛盾があるが、しかしこの矛盾はこの人物の統一性を著しく傷つけるものではない。それというのも、メフィストーフエレスが（サタンの手下のひとりとしてではなしに、一つの統一的存在として（筆者））自由に行動しているという全体的印象が断然立ち勝っているからである（ヴィトコフスキー）」として、メフィストーフエレス像の整合性を何とかして弁

護しようとして計っているが、すでにシラーはゲーテに宛てた一書簡（一七九七年六月二六日）中に、「この悪魔は、リアリストイックな性格によって、その理想主義的本性を止揚している」といい、さらに「理性のみが彼を信ずることができる。そして悟性のみが、あるがままの彼を認め且つ理解することができる」と書いて、メフィストーフエレスの性格の包蔵する不整合性をはっきりと指摘している。

こう見てくると、トーマス・マンのネガティブな規定やヴィトコフスキーのメフィストーフエレスの性格のはらむ矛盾の指摘と「自由に行動しているという全体的印象が断然立ち勝っている」という同様にネガティブな認定も、結局は「常に悪を欲し、却て善を為す、彼力の一部」というゲーテ自身のメフィストーフエレス定義以上に出るものでなく、のみならずゲーテの定義の方がかえって弾力があって、そのパラドクスもさることながら、メフィストーフエレスのすべての行蔵を包括するものであることが判明する。しかもしメフィストーフエレスが、さきにもいったように、一箇便宜のマスク、抽象的存在、劇進行上必要な単なるラダーでないのならば、われわれはどうしたらこの悪魔の形姿を一つの統一的存在として捉えうるであらうか。換言するならば、ゲーテのメフィストーフエレス規定に含まれているパラドクス

はどうしたら解消されるのであろうか。ここでわれわれは暫く主人公ファウストに眼を転じよう。

ファウストの生涯と人間性、グレートヒエン（ヘーレナ）との恋、干潟の干拓という二つの点に集約することのできるファウストの生涯と人間性が、愛を中心に動いていることはたしかである。干潟の干拓という事業そのものは、のちに説くように愛よりむしろ「昇華せしめられた攻撃・破壊衝動」の発現と見るべきではあろうが、その事業を導いているのは、はかならぬ愛、「自由な民と共に、自由な土地の上に住みたい」(11580.) という愛の福音であることは明らかである。ファウストは愛情に生き且つ死ぬ人間である。そして第二部第五幕「山中の谷」森、岩、妻まじき所」の最後の場面においては、「愛」という言葉が、「愛の御庫」「愛の契」「とはなる愛の核心」「大威力の愛」「愛の使」「愛する人」「永遠なる愛の啓示」「愛の同情」「愛して下さる聖なる贖罪の少女達」「永遠なる愛」「聖なる愛の喜」「愛に頼りて」というように十二回も出てくる。

ところでフロイトは、晩年の一論文の中に、この小論申さきにすでに引用したメフィストーフエレスのせりふの一つ、「(生命に対して) これまでいろいろな企をして見ましたが、どうにも手の着けやうがありません」(1364-1378.) 云々の個所を、ある脚註において引用して、こ

書いている。^{*}「ゲーテはメフィストーフエレスにおいて、悪の原理を人間の破壊衝動と同一視しているが、この同一視は至極尤もだとわれわれには考えられるのである。

メフィストーフエレス自身、自分の敵として、神聖なるものや善なるものを挙げてはいず、自然の生殖力、生命の増大力、すなわちエロス、愛を挙げているのである。」

* Freud, *Sämtliche Werke*, Bd. XIV, S. 480, London 1948.

ファウストを「愛」の原理の具現者と観、メフィストーフエレスを「悪」の原理のそれとするというのが最も一般的な整理の仕方であることは、このような規定が決して誤ったものではないということと同様に明らかである。しかしながら、正しい規定が必ずしも充分な規定、完全な規定ではないということもまた明らかである。ゲーテは自然科学者であったという規定は正しい。が、これはゲーテの規定としては不十分であり完全ではない。すなわち悪の化身としてのメフィストーフエレスという規定は、正しいが、不充分、不完全である。なぜならメフィストーフエレスという円の直径は、死・破壊・悪の衝動の体験者という円の直径より大きいということは、この小論において試みられたメフィストーフエレスの性格描写を想起するならば直ちに理解されよう。彼は単に死・破壊・悪の衝動の象徴的存在であるのみならず、そ

れ以外のものでもあるわけで、この意味からフロイトのメフィスト・フェレスの定義は、誤ったものではないが、充分なものであり、完全なものではない。

人間の根本的衝動に関するフロイトの考えは、いろいろの変遷を闊している。フロイトは若い頃、「自我衝動」と「エロスの衝動」という二つの根本的衝動を想定し、前者は個体が個体自身に係り合う衝動、後者は個体が自己の外部のものへ関係して行こうとする衝動と考え、この意味で後者をまた「対象衝動」と呼んだが、のちに個体が自己自身を自己の性愛的対象とすることもあるという事実が見出され、ここに「自己愛」という新しい概念が形成された。こうなってくると、さきの「自我衝動」と「エロスの衝動（対象衝動）」という区別が實際上無意味なものとなってしまわざるをえなくなった。そこで晩年には「エロスの衝動」と「死の衝動」（破壊・攻撃衝動）という対立的な二つの根本衝動を想定するに至った。従ってフロイトは、エロスの衝動の象徴的存在であるところのファウストに対立する存在として、メフィスト・フェレスを死の衝動（破壊・攻撃衝動）の具現者として捉えるわけなのである。

フロイトが人間の根本的な衝動として想定した性愛衝動（エロス）と、破壊・攻撃・否定衝動（死）とは、人間が遠い遙かな動物時代以来引き続き持ち越してきたも

のにはかならない。ところが人間は文化へと一歩踏み出した頃から、新しい心的能力、心的形成物をいくつか後天的に獲得するようになった。すなわち知的能力（知性）はその一つである。そしてフロイトは、その小論文『否定』（Die Verneinung, Bd. XIV, S. 11—15.）において、この知的能力（知性）の発生を心理学的に解明しようとして試みて、知性は、否定という心的作業の所産だとしている。否定という心的作業が、フロイトの想定する人間の根本的衝動の一つであるところの死の衝動の一発露であることは断るまでもない。すなわち知性は死の衝動（破壊・攻撃・否定）を母として生れた子なのである。果せるかな、メフィスト・フェレスは、

わたしなんぞは部分の又部分です。

最初一切であって、後に部分になった暗黒の一部です。

(1349—1350.)

と自己の本体を明らかにしているが、彼のいわゆる「暗黒」が「死・破壊・攻撃・否定・虚無」であることはたしかであろう。さて知性の父親は誰か。疑いもなくそれは人間を取巻いている自然、人間の諸欲求、諸願望を冷然として眺めていて、いつも最後の勝利を占めるところの不気味な自然である。（ゲーテに「人間は自然に逆って行動する時も自然の法則に従う」という有名な言葉があ

る。)つまり知性は、人間の死の衝動と自然との間に出来上ったモドゥス・ヴィヴェンディ、多くの場合、諸衝動の側から、あるいは自然の側から無視され無効にされてしまふのをつねとする妥協案なのである。意識の所有する諸能力中で最も弱い、しかし人間的にユニークなこの知性は、外界(及び身体としての内界)の自然に対しては、根源的諸衝動を代弁し、人間の根源的諸衝動に対しては外界の自然を代弁する。しかしこの代弁者を押しつけて人間の根源的な諸衝動が自然と、また後者が前者と直接に対決折衝することが多いのは改めていうまでもなく、人間の肉体もまたこの自然の一部なのである。——もう一度いうならば、知性は、外界の現実・自然を父とし、人間の根源的衝動の一つであるところの破壊・攻撃・否定・死の衝動を母として生れた心的一機能なのである。

このような考えを背景にして初めて、凡百の『ファウスト』論者がただ並べ立てるにすぎないメフィストーフエレス像の諸特性も、一つの意味ある関連の中に持ちきたされよう。以上によって、メフィストーフエレス像の構成要因としては第一に死の衝動、第二に自然、第三に知性という三つのものが考えられるわけであるが、さきに挙げたその特性の第二(悪と否定の理念)はすなわち第一要因(死の衝動)に帰せしめられるし、特性の第五(好色)は第二要因(自然)に、特性の第三(鋭い

悟性)、第四(人間的なるものへの無理解)、第六(ユーモア)は第三要因に帰せしめられ、特性の第一、サーカズムは第一要因と第三要因とに關係する。すなわちメフィストーフエレスの性格と行動は、このような意味から完全に整合的であり、「常に悪を欲し、却て常に善を為す」はなんらパラドクスではない。

詩人の直観は、メフィストーフエレスという一形姿を創り上げることによって、ものの見事に知と死と自然の關係を捉えてみせた。そしてメフィストーフエレスは、エロスの使徒ファウストのために一敗地にまみれた。しかし知性がその母親(死・破壊・攻撃・否定・虚無)との關係を次第に稀薄にして行くことによって、すなわちいわば母拘束 *Mutterbindung* を克服することによって、生の独立の心的一機能となって行くところ、文化の進行方向があることは疑いを容れないとするならば、恐らくエロスは、これまでの敵・死の代りに、あるいはそれに加えて、新しい敵・知性と対決せざるをえなくなるであろう。そしてこの知性は、いわば純化された・成人となったメフィストーフエレス、すなわち死の胎内から生れ出ながらも、母である死と絶縁した知性なのである。この新しいメフィストーフエレスとファウストとの契約・賭け・戦いの帰趨は、しかし、何人にもわからない。われわれにわかっていることは、知性はエロスや死

のように強くないが、しかしエロスや死のように盲目ではないということと、われわれはこのように意味深いメフィストフェレスという形姿を描き出したゲーテを、「この偉大なる人間を、讃嘆しつつ尊敬」(ライヒ)せざるをえないということとである。